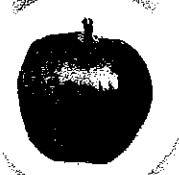


6 リンゴの何を食べるので



長洲 一二

「お百姓さんのご苦労を思ふ」などと、道徳家めいたことを説くつもりはない。ただ、一つぶの米も大事に味わう心は、父祖伝来私たちのなかにあった。それは失つていいものではないと思う。

これも知人に教えられた「りんごの食べ方」という話である。——「りんごを食べるとき、^{*}信州や青森の、冬の雪や春の花、夏の太陽の照り返し、秋口の雨や風、そういうものを、その一つのりんごに味わうのが、ほんとうの食べ方だ。それなのに今多くの人は、ブタのようにただ大食して、なんにも味わつたりしない。つまらない、^{*}貧相な食べ方だ」

もうひとつ、これも人に教えられた、ある母親の話である。——子どもが、母親愛用の電気スタンドをこわした。叱つたら、「ごめん」とも言わずに答えた。「ケチだなあ、お母さん。こんな中古、三千円も出せば、ずっといいのが買えるよ」。母親の言うには、そのスタンドは結婚のとき父親といつしょに買って、もう十数年も使つてきたものだ、その長い生活がこめられている、新型の方が便利とか、三千円か一万円かとかいうものではないのに、それがわからぬのは悲しいと。

ひとつのりんごでも、それで「一体何を食べるのか」人によつてたいへん違う。一個の電気スタンドでも、人はそれで「何を使うのか」は、さまざまだ。この母親は、たんに何ルクスかの明るさだけでなく、十何年かの家庭の思い出もまた使つているのだ。

私は、これは単なる「^{*}儉約」ということとは違うと思う。まして「ケチ」なんかとは全然違う。むしろ逆だ。「ぜいたく」な、と言つてわるければ「豊かな」食べ方、使い方と見ていいのではない。か。今私たちは（私自身も含めて）、こうしたぜいたくさや豊かさを、なくしてしまつたのではないか。

何も味わわずに、ガツガツたくさん食べても、それはぜいたくでも豊かでもない。無感動、無関心に、やたらに使つては捨て、使つては捨てしても、それはかえつて貧しくいやしいと言えそうである。ひとつのりんご、一個の中古電気スタンドでも、食べ方、使い方次第で、すぐ豊かになります。食べる量、使う量、その物量の^{*}多寡だけで、ぜいたくさや豊かさがきまるわけではない。茂吉の短歌に、

ただひとつ惜しみておきし白桃のゆたけきをわれは食ひおはりたり
というのがあった。何と豪奢なまでに豊かな感じではないか。

もちろん、物量が少ない方がいいなどと言つてゐるのではない。ぜいたく自体がいいと言うのでもない。いやしいぜいたくもあるし、美しいぜいたくもある、冷たいケチもあるし、暖かい儉約もあると言いたいのである。

私は、むだ使いはよくないとと思うし、またケチにもなりたくない。それは、ともに美しく充実した豊かさを欠いているからだ。

たとえば私たちはこのごろ、季節感を失つてきた。日本の四季の移り変わりは、たいへんな豊かさ、ぜいたくさだと私は思う。だから私は四季を失いたくない。「春は藤波を見る、夏は郭公を聞く、秋はひぐらしの声、冬は雪をあはれる」^{*}方丈記といつた美しいぜいたくさを、私は味わいつづけたいと思う。

だが私たちは、こうした豊かさを失つてしまつたようだ。むしろ私たちは、四季の変化をなくすことに熱中している。そしてそれを、進歩、発展と考えてゐるようだ。その意味では私たちの欲求自体が、だんだん貧相になり、ぜいたくさを失くしてきているとも言えるようだ。

(P.H.P研究所刊「P.H.P」昭和四十八年八月号による)

豊かな心が豊かさをつくる。(草柳大蔵)

長洲 一二

信州 信濃の国の別称。長野県。

貧相 みすぼらしい。

儉約 けんやく。むだをしないこと。

多寡 たか寡。多いことと少ないこと。

豪奢 ごうしやく。生まれ。歌人、精神科医。誌「アララギ」を編集。一九五三年没。

方丈記

鷗長明著。

鎌倉時代初期の隨筆。

茂吉 斎藤茂吉。一八八二年山形県生まれ。歌人、精神科医。誌「アララギ」を編集。一九五三年没。

豪奢

ぜいたくで、はでなこと。

方丈記

鷗長明著。

鎌倉時代初期の隨筆。

10

5

15

20